



イギリス植民地時代の文化衝突の歴史研究

[キーワード: global environmentalism、植民地支配、野生動物保護、国立公園]

教授 佐久間亮

<研究の概要>

アフリカおよび東南アジア諸国には、夥しい数の国立公園や野生動物保護区があり、これらは、いわゆるエコ・ツーリズムのメッカとなっている。その多くは、歴史的起源をイギリス植民地時代に求めることができる。

19世紀以降、イギリス人は植民地にスポーツ＝ハンティングの文化を持ち込んだ。その結果、野生動物の乱獲が進み、世紀末にはその資源の枯渇が憂慮されることになる。そこで、野生動物保護区、国立公園が続々と創設されていくのである。こうして、植民地支配の下で、ヨーロッパのハンティング文化を持続可能なものとする試みこそが、国立公園の歴史的起源となったのである。その歴史を批判的に検証することが研究の焦点である。

この研究の意義は、まず、しばしば欧米諸国の植民地支配「功罪論」の中で、肯定的に捉えられることの多い自然環境保護の歴史を、文化衝突という観点から再評価することにある。保護政策施行の過程で、現地住民の伝統的な狩りが「密猟」とされていく。熱帯サバンナの過酷な環境下で生き抜くために季節に応じて選択される生業の一つを否定され、かれらは否応なく植民地プランテーション(農園)へと編入されていく。同時に、先祖伝来の地が保護区に指定されることで、土地から追われた者も多い。

さらに、現在の地球規模で行われている自然環境保護運動の起源を明らかにすることも、この研究の意義の一つである。たとえば、大英帝国を基盤に築き上げられたハンターたちの国境を越えた人的ネットワークが、現在の国際自然保護連合や世界自然保護基金の起源となったこと、さらにそのことの持つ意味は、従来の研究では十分に明らかにされ、評価されていないのである。

<主要研究業績>

著書

・川北 稔, 佐久間 亮(2005)『結社のイギリス史- クラブから帝国まで -』山川出版社, 東京

・常松 洋, 佐久間 亮(1997)『日常と犯罪-西洋近代における非合法行為-』昭和堂, 京都

論文

・佐久間亮(2017)「英領マラヤ野生動物保護調査委員会と海峡植民地およびマレー非連合州世論」, 『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』25号, 1頁-26頁

・佐久間亮(2013)「英領マラヤにおける野生動物保護政策の展開 1921年-30年」, 『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』21号, 61頁-83頁

・佐久間亮(2008)「英領タンガニーカにおける「自然の創造」」, 『立命館文学』605号, 643頁-658頁

・佐久間亮(1999)「英領アフリカにおける自然保護政策の展開 -ウガンダ保護領1906-11年 -」, 『立命館文学』558号, 311頁-339頁

専門分野 : ヨーロッパ近代史

E-mail: sakuma@tokushima-u.ac.jp

Tel : 088-656-7152

詳細情報 : <http://pub2.db.tokushima-u.ac.jp/ERD/person/60554/profile-ja.html>